

関西学院のキリスト教主義教育 ——欠けは多くても愛は豊かに

関西学院宗教総主事・関西学院大学社会学部教授 打樋 啓史



草創期の関西学院

1889（明治22）年9月にランパス宣教師らが兵庫県に提出した関西学院の設立願が、同月28日に県知事によって認可され、同年10月11日から正式に授業が開始されました。神戸・原田の森の校地で、教師5名、学生19名での出発。一万坪の広大な森に最初に建てられたのは、校舎（1階）と寄宿舍（2階）から成る木造2階建てと平屋建ての付属棟、この2棟だけでした。

いずれも大変簡素なものだったようで、後に関西学院で国語や漢文を教えることになる村上博輔が、当時学院を訪れた際、教室の様子をこう記しています。「風通しのよい、器具も粗末で不揃いな、とても狭い教室。腰かけが4脚しかないところもある。うどん屋の座敷に入ったような気がした」（『関西學報』第8号、1909、大意）。

また授業科目や内容についても、当時の生徒が、「とにかく英語が進んでいて、地理歴史は全部西洋人の教師から英語で学んだが、科学はとにかく不十分を免れなかった」（『関西學報』第9号、1910、大意）と回想しているように、一人の教師が専門でない他の何科目も教えていたので、色々と欠けが多かったことがわかります。

施設の面でも、授業の面でも、すべてが整っているのは程遠い環境のなかで、できることから始めていった。それが関西学院の始まりでした。それに関して、前出の村上博輔は印象的な記述を残しています。村上は、粗末な教室だったけれど、「自分はここの教育に大いに感動した」と言います。何に感動したかという、「教師生徒の親睦が目新しく自分の心を動かした」というのです。「教師は生徒をまるでわが子のように思っている」と。

村上は、当時の一般的な教師が、「役にも立たない理屈を並べて、生徒を驚かせたり、自分を飾って偉そうに見せたりしていたのに対して、ここにはまったくそれがなかった」と記します。さらに、「ただ生徒を育てることだけを考^{シンプル}えている。講義はとても簡単だが、ここに真の教育の味が見える」とし、「人間は枝葉を華美にして根本を忘れがちだが、ここにはそれがなく、根本を大切にしている。そこに自然と豊かな枝葉ができてくる」と続けます（『関西學報』第8号、大意）。

教師と生徒が仲睦まじく、教師は心から生徒のことを思い、人として大切に育てようとしていた。それゆえに、枝葉で飾らず、根本を重んじる教育に専念していた。私はこ

の頃の関西学院での授業の様子を想像すると、心が熱くなります。そこには大きな愛があったと思います。施設も授業も欠けは多かったけれども、愛は豊かだった。教師たちが生徒たちを思う愛は、溢れんばかりに豊かだった。そういう学校として関西学院は始まったのです。

キリスト教の本質としての「愛」

この「愛」はどこから来るものだったのでしょうか。関西学院が創立された際に作成された「関西学院憲法」第二款には、学院の目的として、「基督教ノ主義ニ拠リテ日本青年ニ知徳兼備ノ教育ヲ授クルニアリ」と記され、ここに「キリスト教主義に基づく全人教育」という学院の建学の精神が明示されました。「基督教ノ主義」と訳された元の英文は“the principles of Christianity”で、「キリスト教の本質」と訳すこともできます。

キリスト教の本質、それは「愛」にはかなりません。「神は愛です」（Iヨハネ4:16）と聖書が宣言する通りです。イエス・キリストは、その生と死のすべてによって、「神は愛」であることを伝えました。そして、人間がその愛に生かされ、互いに愛し合い、仕え合う道を開いたのでした。

関西学院の目的・存在理由であるキリスト教主義教育とは、この愛に基づいて若い人々を全人的に育てていくことであり、草創期の教師たちはそれを日々実践していたのです。朝夕の礼拝の中で、自分が神に愛されていることを実感し、その感謝と喜びを源として、生徒を愛し育てていく。この最も根本的な真実を、まさに「建学の精神」を、彼らは生きていたのでしょうか。

135年の時を経て、関西学院は8つのキャンパスに28,000人を超える園児・児童・生徒・学生が在籍する総合学園となりました。施設面でも、授業の面でも、創立時から大きな発展を遂げました。しかし、私たちは愛において豊かでしょうか。草創期の教師たちが、生徒をわが子のように思い、人として大切に育てようとした、その教育は今も生きていますでしょうか。自戒の念を込めて記すのですが、大きくなり、豊かになることで、私たちは根本を忘れてしまいがちです。

クリスマスを待ち望むこの季節、「愛に基づく全人教育」という学院の存在理由に心に向け、そこに立ち返ることができればと願います。

（うてび けいじ）